

16 「土屋の古道を歩く」 --ぶらり土屋--

「みち」～道・路・径・小道・道路～。それは、人がそこに生活を始めたときから、木の実を採りに行くために、狩猟のために踏み分けられたみち、また、農耕のために踏み分けられたみちなどから、必要に応じて利用する人が多くなり、そこに「みち」として定着してきたと思われます。

その「みち」は、生活の変化にともなって一般生活道・農作業道などとしてその形を変え、整備されてその機能を果たしてきました。近年になって、都市化の進展にともない新しい道路も開通し、農道や幹線市道・県道等も一層拡幅・整備されてきました。これにともない、現在はあまり利用されていない道や、廃道同然、また分断された道も少なくはありません。

このように、新道の開通や既設道路の拡幅・整備などは、他地域への往来時間を短縮させ、隣・近所への行き来も非常に便利にさせました。また、山林や近隣地域の開発等は、土屋に住む私たちの生活に大きく影響し、生活様式を一変させたと思います。

時代の変化にともなって、その要請に応えながら発展してきたこれらの「道路」が、千年も二千年も前の「けものみち」を、長い年月のあいだに、いつしか私たちの祖先が利用した道であったり、また、厳しい条件の中で遠い先祖が生きぬいていくために利用した生活道であったりして、これが今日に至っても使用されていると思うとき、私たちは胸のときめきを感じます。

こうした古道は、民家の脇を通ったり、里山の雑木林の中を分け入ったり、谷戸（やと）のふちを通ったり、田んぼや畑の畦（あぜ）を通ったりして土屋じゅうを走っています。これらの古道を歩くと、春には谷戸田のあちこちで「田おこし」の土のにおいがし、夏の暑い日の畦道では、そよぐ風にのって田んぼの稲のにおいがして、秋には稲の収穫が終えた稲藁が野積みになれ、その横では初摺り（からうす）の終わった「もみがら」を焼くにおいが郷愁を誘い、冬の林のなかでは、落葉を踏みならす音が何とも言えない心地よさを感じさせます。また、民家の脇道を歩くと、北側の薄暗いひんやりした空気を感じ、そしてその家の「生活音」も耳にすることがあります。

このような時、私たちは「我が里、土屋を歩いている」のだなと、やすらぎの気持ちを覚えます。

そこで、土屋に住むみなさんにも、この古道をぜひ歩いていただき、「土屋の里」の四季を感じとり、土屋の変遷とその当時の様子を感じていただけたらと思います。

地図のなかでは、古道は実線（———）で、近年設定された道路は細線（—————）で、また、今はなき古道は破線（- - - - -）で表しましたので参考にしてください。



